【巻頭言】

台湾はいつ日本と戦争したのか

本会会長・前拓殖大学総長　小田村四郎

盧溝橋事件勃発記念日に当る七月七日、連戦国民党主席（当時）は談話を発表し、「抗日戦争」は「全国同胞の覚醒と奮起によるものであり、……戦争を振り返ることで悲痛な歴史を知り、……決してそれを忘れることはでき」ない、と述べた。驚くべきことに陳水扁総統までが同日、中部地区での演習視察後の昼食会で、「今年は『抗戦勝利六十周年』に当る。我々はここに、敵と戦つた軍のすべての英雄たちの犠牲的精神に対し、最高の敬意を表したい」と挨拶した。

この報道を見て、私は異様な違和感を覚えた。我々は蔣介石率ゐる国民政府と戦火を交へたが、台湾国民と戦争した覚えはない。否、台湾島民こそ我々と同じ日本国民同胞として共に敵と戦つた「戦友」だつた。不幸にして散華された約二万八千柱の台湾英霊は、内地人戦死者と等しく靖國神社に合祀され、日本国民は日夜感謝の祈りを捧げてゐる。

にも拘らず連戦氏はシナ大陸人民を「同胞」と呼び、台湾人の敵だつた国の戦争を自国の歴史と称し、陳水扁総統までがこれに同調する。

台湾が独立主権国家であることは厳然たる客観的事実である。しかし台湾国民自身が自国の版図をどう考へてゐるのだらうか。もし四百余州、蒙古、西蔵まで領土だといふのなら、日本を含めて全世界が相手にしないだらう。李登輝前総統が「新台湾人」を主唱し、「正名運動」を主宰し、「台湾人のアイデンティティ」確立を叫ばれることに耳を傾けて欲しい。

このやうな台湾人の独立意識の曖昧さこそ台湾併呑を狙ふ中共の思ふ壺である。石平氏が「動き出した『大陸・台湾反日同盟』の仕掛け人」（「正論」十月号）で警告された通り、胡錦濤は九月三日、人民大会堂で国民党の抗日戦での功績を高く評価したといふ（九・一九産経）。「中国人意識」の亡霊を一掃することこそ台湾の急務と思ふ。

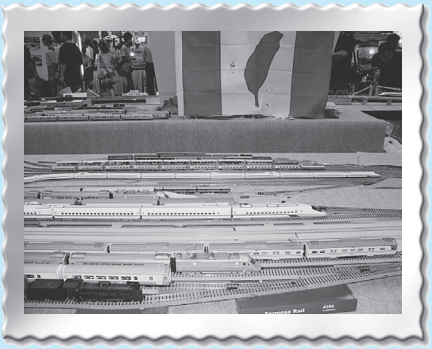
日台共栄写真館

平成17年８月19日～21日

国際鉄道模型コンベンションに台湾型鉄道模型が初登場

東京・有明の東京国際展示場・ビッグサイトにおいて「第６回国際鉄道模型コンベンション」が開催され（入場者：延べ 48,000 人）、日本で初めて台湾新幹線や自強号などの台湾型鉄道模型が登場した1。このコーナーの出展は台湾研究フォーラムで2、日本李登輝友の会と日台鉄路愛好会が後援し、開通式には台北駐日経済文化代表処（大使館に相当）の李世昌文化部長とコンベンション主催者の吉村光夫会長も参加された3。

台湾鉄道の初お目見えということで、子供から台湾の鉄道事業に携わっている方まで多くの人が足をとめ、とりわけ日台交流のシンボル台湾新幹線は大人気だった4。実物は開業が１年延期されることとなったが、今後も本会と「鉄ちゃん」（鉄道ファン）は台湾鉄道を応援していく。



1

2

3

4